
黒歴史

ぱすてーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒歴史

【Nコード】

N4058M

【作者名】

ばすてーく

【あらすじ】

爆発はロマンだと思います。多分。

（前書き）

昔やったゲームのオマージュ的なギャグネタです。

昔書いたものが出てきたので、明らかに黒歴史ですが、
作者が実はMなのか、掲載してみることにしました。

そっというのが嫌という方は回れ右をした方が良いと思います。

「た、大変だ！」

「ど、どうしたんだ！？ クラス委員でがり勉タイプの眼鏡の木村君！」

突然教室に飛び込んで来たクラスメイトの姿に、教室の至る所から訝しげな視線が向けられる。

それもその筈。がり勉タイプの眼鏡の木村君が叫んでいる姿等、見たことが無かったからだ。

「……これを見てくれ！」

……そこには、無骨な形をした不思議な装置があった。中央には何かのタイマーのようなものが備え付いている。

「……なんか、漫画に出てくる爆弾みたいだな」

そう、タイマーっぽいものと言い、やたら大きく、不細工な箱っぽいものと言い、

インターネットを見ながら、真心を込めて作りましたと言わんばかりに自己主張をする手作り爆弾のように見えた。

「そうだよ！ 爆弾なんだよ！ これはああ！」

焦ったように叫ぶ木村君。当然周囲には唾が撒き散らされるが、それを汚いと言う余裕は無く。

「……ナ、ナンダッテ……」

まるで木村君がキバ。シになったかのような錯覚を起こしそうになるリアクションを取るクラスメート一同。

「もう時間が無いんだ！ 無いんだよ……！」

「は、はやく解体を」

そう。爆弾と言えば解体。赤か黒かの二択ではあるが、このまま爆死するよりはずっとマシ……！

そう考えて男子Aが発言したのだが。

「バカ！ 漫画じゃないんだ！ SSなんだ、そんな技能持つてる訳ないだろ！」

そう、漫画もSSも似たようなもののようにも思えるが、そこはようするに設定次第。

爆弾解体なんてマイナーな技能を持った人間がこのSSでは存在しないのだ。

「それ以前に時間を見てくれ！」

そう言われ、木村君の周りに集まっていたクラスメイト達が爆弾のタイマーを覗き込む。

「00:00:56」

「もう時間が無いじゃないか！ 後56秒、55秒なんだぞ！」

「その通りだ！ もうどうしようもないんだよ！ 後51秒だしね！」

「……ちょっと待て、木村、お前どうして爆弾を持ってこの教室に？」

「あ！」

「てめ……！ まさか巻き添えにしようとして……！」

「違うな……（後44秒か……）」

木村君に掴みかかろうとした男子Bを声で押し留める怜悯な声。その声の主は腕を組みながら、悠然とその姿を現した。

「ど、どうということなんだ、いくつもの難解な事件を解決してきた苦藤君！」

何故爆弾解体の技能を持った人間は居ないのに、難解な事件を解決出来る高校生がクラスメイトに居るのか？

それは推理小説補正というものだから、そうしか言いようが無い。これは推理小説ではないが。

「いいか？ こんな世の中だ、爆弾があつたって不思議じゃーない。だが、いきなりこれを見て、これが爆弾で、もうすぐ爆発する。だなんて、現実的に考えられる奴はそう居ないだろう？

今クラスが騒然としているのは、木村が、これが爆弾でもうすぐ爆発する、そう言ったからだ」

独自の推理と理論。それが導き出す答えは……！

「……ま、まさか！」

教室中の視線が、一点へと集束する。

「00:00:35」

「クケエーケツケツ！ ばあーれえーたあーかあー！ その通りだ！ この爆弾を作ったのは僕だ！」

まるで変身型宇宙人が正体を暴かれた時のように叫ぶ木村君。

別に肌の色は変わらないが、某裁判ゲームの如く、何故か便底眼鏡はずれて、つるが折れ、

髪の毛は七三分けから八二分けになっている。

「なんでなの……？ 木村君、クラス委員で真面目で、がり勉な貴方がどうして!？」

「それだよ！」

女子Aの発言に、見た目にもわかるくらいにその表情を歪める木村

君。

「どれ!？」

「僕だつてなあ、帰りにカラオケに誘つて欲しいし、週末には合コンに明け暮りたい！」

なのに、誰も誘つてくれない、それもこれも、お前達が僕のことをガリ勉だなんて言うからだ！」

実は合コンに誘われたかった。木村君の悲哀を感じさせる発言も、今は同情する余地が無い。

「そ、そんな……そんな瓶底眼鏡をかけてるから！ それに休み時間にはせつせと勉強してるし！」

「五月蠅い！ 大体僕はガリ勉なんかじゃないんだ！ 成績なんていつも2か赤線（1のこと）だし、休み時間はせつせと漫画を描いてるんだ！」

このパラパラ漫画をなあ……」

言いながら、何故かノートのページを広げてパラパラして見せる。確かにそれは……紛うこと無くパラパラ漫画。どこからどう見てもパラパラ漫画だった。

「……ナ、ナンダッテ……」

再び沸く教室。

「週末に合コンに誘つてくれないような奴らなんて死んでしまえばいいんだ！ くけえーけっけっけえー……ぐっ！ ……」

鈍い音を立て、後頭部に衝撃を受けた木村君がうつ伏せに地面に倒れ臥す。

奇声を発していた木村君を後ろから殴ったのはやっぱり苦藤君。殴る為に手に取ったものは当然のようにパイプイスだった。教室なの

に！

「00:00:15」

「く、苦藤……！ どうすんだよ！ もう爆発しちゃうぜ！？」
焦った様子で男子Bが声を荒げる。

「……（火薬の臭い……どうやら本物ではあるようだ）」
爆弾に顔を近づけて臭いを嗅ぎ、爆弾が本物であることを確かめた
苦藤君。

「……皆、
よく聞いてくれ！ いいか、これから爆弾が爆発する。それは止
められない（だって爆弾だから）」
爆弾は爆発する。何故ならば爆弾だから。爆発しないのは爆弾では
なく、なんちゃって爆弾だ。

「……ゴク」
唾を飲み込む声が教室のあちらこちらから聞こえる。まだどこか、
現実ではないような不思議な感覚だったのだ。
そこが、ここに来て苦藤君の爆弾大爆発発言によって現実感を伴っ
てしまった。

「だから、これから俺の言うことをよく聞くんだ！」
「聞いてどうするっていうんだよ！」
今更、爆弾が爆発するという事態を前にして、苦藤君の言葉を聞い
てどうなるのか、そう考えて男子Aが叫んだ。
しかし……

「聞け！」
やはり役者が違うのか、力強い苦藤君の言葉に、男子Aは
「あ……ああ、分かったよ」
力なく、頷く。

「良いか！？ 爆弾は爆発する。これは止められない。だけど、爆発した瞬間、

出来るだけギャグっぽく大声を上げながら吹っ飛ぶんだ！ そうすれば助かる！」

どこそのギャグゲーのようなことを言い出す苦藤君。真面目な顔で言っているだけに、そのギャップは中々のものだった。

「く、くどう君……？ 何を」

当然のように、入る突っ込み。おずおずとした様子だったが、正気を疑っているように見える。

「ただし、ぶべばつとかひでぶつとかはダメだ！ これは普通に死ぬ可能性がある。

それと、死ぬ可能性があるからって、俺、これが終わったら家に帰ってゝするよ。とか、

きっと生きてまた会える……！ とか、

そういう発現をするな！ 良いな！？」

死亡フラグを立てるなと暗に言う苦藤君。

「……え、うん」

最早頷くしかない。だって爆弾は後5秒で爆発するから。

「出来るだけギャグっぽく吹っ飛べ……もう時間が無い、行つく、ぞおおー……！！」

「はうあああ！」「目が、目がああー！」「太陽の目が見えた……！」「おがぁーさん！」

……強烈な光と爆風を巻き上げ、部屋全体を膨張させるような、その爆発の最中、クラスメイト達は、難しい注文を上手くこなし、ギャグっぽく吹っ飛んでいった。

大惨事が起こったかのような教室の中（大爆発が起こったのですが）。

不思議と、怪我を負ったような生徒はいなかった。

もつとも、アフロになっている生徒が7割。髪の毛すら無い生徒が1割、服が煤けている生徒が10割を占めていたが。

「ありがとう！ 苦藤！ お前のおかげで助か……、って何見て」
…… 苦藤の前には、一人の男が横たわっていた。そう、木村だ。

「あ……そうか、そいつはギャグっぽく吹っ飛ぶ暇も……」
気まずそうに言う男子A。そう、爆弾騒動を起こしたとはいえ、クラスメイトだった男なのだ。しかも合コンを望んでいたという点では、男として理解出来る部分が多い。

「いや、大丈夫だ。……どうやら、こいつは存在自体がギャグだったんだろう」

「そ、そうか」

「……恐ろしい事件だった。だが、どんな事件だろうと、犯人は必ず俺が暴いてみせる！ じっちゃんはいつも一つ！」

こうして、教室爆発事件は終わりを告げた…… だが、苦藤の戦い（？）はまだ始まったばかりだった。

祖父は二人居る筈なのだが、彼の祖父の片方は鬼籍に入っているのかもしれない……。

（後書き）

のんきに話している間に教室から出るよとか思つかもかもしれませんが、それは出来ません。

「＜「移動」

「＜「廊下」

「爆弾からは逃げられない」

というか、爆弾がどこか偽物じゃないのかと疑っていて、だれも逃げないから大丈夫なんだろうという日本人的思考に陥っていたということにして下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058m/>

黒歴史

2010年12月10日22時51分発行